

専攻名 法学・政治学専攻 選抜区分 一般

科目名 政治思想史 記載者氏名 \_\_\_\_\_

解答例及び出題意図

問題1

バーリンは、他者による介入や妨害が存在せず、その都度自分の欲求に従って、行動を選択できるという意味の「消極的自由 negative liberty」と、合理的・反省的によって自らを律し、目的を実現するという意味の「積極的自由 positive liberty」を区別した。例えば、試験の勉強をしようとして一度決意していても、他人の干渉がないため、眠り込んでしまうのは、消極的な意味で自由と言えるが、自分の定めた目的を目指した行動をすべく、自己を律することができていないので、積極的な意味では自由と言えない。バーリンは、「積極的自由」を、政治の目標にすれば、深刻な問題が生じることと指摘している。何故なら、同じ人間の中に、本来人間として追求すべき目的を追求する「高次の自己」と、刹那的な欲望に振り回されて、一貫性のない行動を取る「低次の自己」が同居していると想定したうえで、後者の欲望を、政治的制度によって人為的に抑圧することで、前者の意志を実現することが、本人のためになるという発想に繋がりがやすいからだ。スターリン時代のソ連では、共産主義社会を建設するという、人民の「高次の自己」の願い＝「本当の自由」を実現するという名目の下で、“次元の低い欲望”に従う体制批判者たちが迫害され、“思想教育”を施された。そうした考察からバーリンは、「消極的自由」の方が、「自由」の定義として適切だと考えた。

出題意図:「自由」という概念は多義的であり、そのため、「自由主義」と呼ばれるものの内部に様々な理論的な対立がある。その最も典型的な論点についての古典的な問題提起をきちんと理解しているか確認することが狙い。

問題2

近代自由主義は、幸福や価値観、ライフスタイルに関わる「善 good」は個人ごとに異なるという前提に立ち、法や政治はできるだけ「善」には関わらず、「善」と「善」が対立した時に、問題を解決するための「正 right」、つまり「正義 justice」や「権利 right」の基準を定め、それを遵守することに徹すべきだという立場を取る。「正」は、特定の個人や集団の「善」に偏ることのない、中立的な基準でなければならない。自由主義にとって、「善」は、各人が私的領域において自分なりのやり方で追求すべきものであり、公的領域における政治のテーマとしてはふさわしくない。サンデルは、各人のアイデンティティや価値観が、その人が属する共同体の中で形成されるものであり、自らの「善」を選択し追求する能力も、共同体全体の「目的」＝「善」である「共通善 common good」との関係によって強く規定されると主張する。従って、「善」の問題抜きに、「正(義)」を論ずることはできない。そうした視点からサンデルは、リベラルの代表格であるロールズとリバタリアンの代表格であるノージックの共通の前提である「善に対する正の優位」を批判する。サンデルに言わせれば、「善に対する正の優位」に固執し、「善」についての実質的な判断を回避する自由主義は、本当の意味で自由を尊重できない。例えば、週のどの日を休日にすべきかという問題に関して、宗教上の理由から安息日を大事にする人の要求と、気紛れで水曜日に休みたいという人のそれを、手続き上同等に扱わねばならない。また、権利保護を求める性的マイノリティのデモ行進と、ネオナ

子など排他的な集団によるそれも同等に扱わざるを得ない。そのため、多数派の圧力に抗して自らの生き方や価値観を守ろうとする少数派の人々の自由や権利に配慮した政治を行うことができなくなる。それは、多数派の専制に抗して自由を擁護してきた、近代自由主義の自己矛盾である。そうした視点から、サンデルは手続き的正義に拘る自由主義を批判し、「善」をめぐる公共的論議の復権を主張する。

出題意図：現代の英米の政治哲学における最も重要な争点になっているコミュニタリアン vs. リベラル論争で何が争点になっているか、的確に把握しているか見ることが狙い。